

「おどかすなよ」

祐くんがビビってる。

「ハハハ、こわがりなんだな」

「…かもな」

祐くんは否定しない。

——スポーツ万能でみんなに頼りにされてる祐くんなのに、意外とこわがりなのかな。

まあくんは、ためしてみたくなった。

「あっ、へび！」

まあくんが、祐くんの足元を指さした。

「えっ！」

祐くんがとびのいた。そのひょうしに石につまずいてしりもちをついた。たまごが、グニョッとつぶれた。

「ハハハハハ」

まあくんが、おなかをかかえてわらった。

祐くんのズボンがビチョビチョだ。

「たまごが一つ、割れちゃったんだぞ！」

祐くんが怒った。

ドキッとした。でも、祐くんがムキになって怒れば怒るほど笑いがこみあげてきた。笑っちゃいけないところだっ
てわかるのに、笑いのつぼにはまったようにおかしいのだ。

「まあくん、やなやつ！」

祐くんが、プーとほっぺたをふくらませた。

「ご、ごめん、ごめん…」

あやまりながらも、まだおかしくて…。

「なにが、おかしいんだよ！ほんとやなやつだなっ！」
祐くんが、キツとにらみつけた。いっしゅんに笑いが吹

っ飛んで、まあくんの口から言葉が飛び出した。

「ほんとの《やなやつ》ってのは、こうするのさ」

まあくんは、残ったもうひとつのたまごをつかんだ。そして、足の前におくとサッカーボールみたいにけとばした。たまごがパンとはじけた。

「あっ」

祐くんが、ビックリした顔でまあくんを見た。

「ふん」

まあくんは、そっぽをむいた。

「もう、まあくんなんか友達じゃないっ！」

祐くんは、そでで涙をぬぐいながら走っていった。

「たかが、たまごじゃないか。毎日食べてるくせにィ！」
祐くんのせなかにむけてさけんだ。だけど、とびちって
るたまごを見たら、まあくんの目に涙があふれた。

☆ ☆

——ぼくって、祐くんというとおり、ほんとやなやつ。
あの時、どうしてたまごをけとばしたんだろう？ あー

あ、自分で自分がいやになる。もう、祐くん会ってくれな
いだろうな。